「一リットルの涙」と「茶碗一杯の青汁」

高松文三

脊髄小脳変性症と呼ばれる病気があり、十万人に対し四、五人の割り合いで発症するらしい。 運動機能を司る小脳や脊髄が萎縮して、しだいに働きを失ってゆく病気で、国の指定する難病(特定疾患)の一つである。症状の進行は緩やかだが、若い時に発病すると、五年から十年で死ぬことが多いという。初めのうちはよく転ぶようになり、そのうち立つことも出来なくなり、いずれは寝たきり状態になり、口をまともに動かすこともままならなくなる。大脳の方はしっかりしているので、そういう自分をハッキリ認識出来る分だけ余計につらい病気である。この病が世に知られるようになったのはおそらく「一リットルの涙」という本が映画化され、テレビドラマ化されたことが大きいようだ。

木藤亜矢さんは中学三年の時この診断を下され、それから約十年で亡くなった。その間の日記をまとめたのが、「ーリットルの涙」である。「なぜ自分は生まれてきたのだろう」と言う悲痛な叫びに母親が応えて本にしたのである。過酷な闘病記であるが、二百十万部を超える大ベストセラーとなり、多くの人が涙し、勇気をもらい、また現状に感謝出来るようになったと想像する。

亜矢さんが生まれた同じ年、1962年に生まれ た森美智代さんは二十一歳の時同じ病に罹る。 あまりによく転ぶのでおかしいと思い医者に行く のだが、何も問題は無いという。最終的には、 神経科で CT スキャンを受けて初めて診断を下 されるのだが、治療法は無いと言われる。森 さんは小学校の保険の先生になったばかりだっ た。同じく保険の先生だった叔母さんに憧れて なったのだが、森さんがまだ高校生の時そのお ばさんに連れられて、甲田光男先生の講演を聴 き、同時に半断食も経験している。甲田先生と いうのは、五十年に亘り自らの病院で断食療法 を使って、難病に苦しむ人たちを救ってきた医 師である。森さんは、この時、もし将来何かあっ たらこの先生に見てもらおうと思った。そのこと を思い出した彼女は、わらをもすがる思いで甲 田先生に診てもらうのである。甲田先生はしば らく森さんのお腹を触診してから「断食すれば 治りますよ」と言い切る。森さんは、治らない と言う専門医師に従うよりも、決して専門医で はないが、治ると言ってくれる甲田先生につい て行こうと決心する。

仕事は続けられるだけ続け、合間を見ては、甲 田病院で短期の断食をする。症状は少し改善す るのだが、食べ始めるとまた悪化するというこ との繰り返しがしばらく続く。そうこうするうち に仕事に支障を来すようになり、とうとう仕事 はきっぱりと辞めて治療に専念する決意をする。 長期断食が決め手である。一回目は二十四日 間。この間症状が悪化し、立っていることが出 来ず、這うことしか出来なくなり、本当に治る のだろうかという不安が続く。しかし終わってみ ると症状はだいぶ改善する。まだふらつきはあ るが以前よりはだいぶいい。先生の計画はもう 一度長期断食をやって、その後玄米生菜食を するというものだ。その二ヶ月後に森さんは二 度目の長期断食に入る。一回目の断食からの 体重の回復が十分ではないという不安も入り交 じっての二回目であったが、経過は順調で元気 もありふらつきもかなり改善する。甲田先生の 指示で二回目の断食は二十日で打ち切られる。 二回目の断食後は、一回目に反して体重の回復 が異常に早く基礎代謝量に満たないカロリーで もどんどん体重が増えるのである。そうして調 節しているうちに最終的に落ち着いたのは一日 茶碗一杯の青汁(百キロカロリー以下)である。 森さんはもう十五年以上これを続けている。病 気は完全に治り、今は縁あって鍼灸師として一 隅を照らす、充実した生活を送っている。

人は何によって生きているのだろう?「パンのみ によって生きるにあらず」とはよく聞く言葉だ。 森さんのような例を見ると確かにそれは文字通 りそうなのだと思う。聖書では「神の口から出 る言葉による」と続く。要するに目に見えなくて、 尊いエネルギーということだから、大宇宙の愛 と解釈していいのではないか。大宇宙を神と言 い換えてもいい。それはむろん誰の上にでも平 等に普遍的に注がれるものである。それを常時 感じ取れる人は幸福である。分からない人は 往々にして事故や大病によって知らされることが ある。日常生活の煩雑に埋もれていてはなかな か分からないものだ。あえて非日常を作ること で味わうことも出来る。その好例が断食である。 断食により体に内蔵されている自然治癒力が最 高度に発動するという事実はまさしく大宇宙の 愛の普遍性を物語ると思う。もし、先に挙げた 脊髄小脳変性症等の難病がとてつもなく高価な 治療法でしか治らないとしたら、あるいは一定 の条件を満たしている人しか治らないとしたら、 誰にでも平等に愛が注がれているとは言えまい。 しかし、食を断つという行為は、どこに住んで いる人でも、どんなに貧乏でも出来る。例外な しに誰にでも出来る行為なのだ。どんな状況に 置かれても誰にでも出来る方法で大宇宙は救っ てくれるのである。最後の切り札を誰にでも平 等に与えたのだ。

私には上に挙げた二人共々菩薩に見える。木藤亜矢さんは死を持って我々に日常の奇跡、有り難さを教え、森美智代さんは生を持って偏在

する大宇宙の愛を教えてくれた。この二人に大感謝である。

高松文三

1956 生まれ。

1983 年、ニューメキシコ・サンタフェの Kotota-ma Insutitute(言霊塾) 卒業。

1988 年よりダラスにて開業。

2005 年、University of Texas at Dallas 卒業。 2006 年グアダラハラ、メキシコに移住するが、 2008 年、再びダラスに戻り開業。

- 前ページ「言霊いのち・・」より続く-

この時点で私は操体テクニックを使い、必ず筋骨格ストレッチの活法を行う。「魂(タマ)タッチ」という、指-親指で触れる治療を奇経に行う。脈状は4、5度チェックする。もし、まだ実の脈が残っていれば、さらに腹部に手当てを加え、実の状態を取り去る。脈が整った時点で治療は終了する。私は「ありがとうございました。」と言うことで、患者に治療が終わったことを告げる。この治療は25-30分である。少数だがこのような治療法を私と学んだ治療家が存在する。彼らは、素晴らしい結果を求めて、枠の外に踏み出したのだ。

翻訳:和田雅子

トーマス・ダックワース L.Ac.

言霊ライフ医学の医家。1973年から言霊ライフ医学創立者の中薗雅尋大先生に師事し始めた。1980年より治療院経営。中薗先生は1987年、彼に言霊ライフ医学の博士号を与えた。